

## 江東区における内部河川利用の変遷と現況

床次久美

江東区は、区域のほとんどが江戸時代からの海面埋立てによって達成されてきた地域で、河川と港湾に囲まれている。土地造成に伴い、多くの中小河川が開削されたが、港湾部（運河）を除いた20河川が現在「内部河川」と呼ばれており、延長32.35km、面積1,153.655㎡に及んでいる。水辺の存在、内部河川の存在は、江東区の様々な地域特性を生みだしてきた。そして、河川の利用や整備の方法および河川に対する意識の変化に応じて、内部河川の在り方も変わってきている。

内部河川の開削は1590年の小名木川開削に始まり、江東区の開発もこれによって本格的に開始された。その後、江戸の都市計画に従い、縦横の河川網が形成される。江戸時代には江東区は水運を利用した小売業や倉庫業、貯木場と材木業が成立すると同時に、交通の便が良い行楽地、武家別荘地、近郊農地という性格を併せ持っていた。明治期に入ると殖産興業政策下で、充実した水路網の存在は、工業立地の基盤となる。鉄道・道路の整備が水路網があったために遅れたことも、工業地域という性格を強めることとなった。重化学工業化の展開や、第2次大戦後の東京の市街地の急成長に伴い、江東区の内部構造に変化がもたらされたが、一貫して比較的、工業が優勢な地域であった。

しかし、工業や水運そのものの不振、斜陽化に加え、工場移転促進や地盤沈下による水運の困難が重なり、高度経済成長以降は江東区の性格が変わってくる。

陸上交通と下水道整備によって利用が衰退する一方、水質が悪化し、地盤沈下の進行で洪水の危険性が増すと、内部河川は治水上・衛生上の障害物とされる。よって同様の状況にある他地域では内部河川の埋立て、暗渠化が進むところが多い。江東区でも埋立ての方針を進めていた。しかし、「0m地帯」という特殊な状況下で、雨水貯溜と

排水を目的とした治水上の必要性が強かったことなどから、河川の埋立ての実現は一部にとどまり、防災上必要な河川補修が施されながら維持されていた。

低成長期に入ってから、自然環境やオープンスペースが見直される中で河川が注目され、水辺への関心が強まるようになる。昭和40年代にあらわれた「親水」という用語と概念が普及・定着し、河川改修の方向を広げた。幸い埋立てられずに残っていた江東区の内部河川についても、水面を残す方向での改修・利用が考えられるようになった。昭和50年代に江東区の最初の親水公園である「仙台堀川公園」が開園してから、今年までに合計4つの親水公園が開園している。

江東区は、河川沿いに多く立地していた工場が移転した跡地に、高層集合住宅が建設され、都心に近接していることから住宅地としての色彩を強めだしてきている。都市の性格が変わってくる中で防災拠点としても、生活環境の向上のためにも、公園の需要は高い。内部河川の「親水公園化」が積極的に進められている一つの要因である。

このように江東区の内部河川の利用は、各時代の都市の性格と関連し合って変化しているのである。

しかし、近年の「親水公園化」については、これを推す必然性は確かにあるが、疑問の余地もある。「公園」としてではなく「河川」としての再生も試みられる価値があると思われるからである。1985年に航行を開始した区営の水上バスは、現在のところ観光・遊覧目的のみに徹しているが、河川利用には様々な可能性がある。江東区に独特な「河川網」を実質的に活かすことが出来るかが課題である。河川利用は河川整備方法に大きく影響されるため、河川改修者である行政側の方針にも注目していきたい。